



北海道バスケットボール協会
指導者育成専門委員会
2014/08/06(水)

タクティクス (HBA指導者育成専門委員会ブログ)

NO. 151

平成26年度 全国高等学校バスケットボール選手権大会

北海道予選北見大会をふり返って

6月20日(金)～22日(日) 会場 北見市道立体育館・他

北海道バスケットボール協会
指導者育成委員
前野 和義

【男子の部】

優勝 東海大学附属第四高等学校
第2位 駒沢大学附属苫小牧高等学校
第3位 北海道札幌工業高等学校
第3位 海星学院高等学校

【はじめに】

北見北斗高校を当番校として、第67回インターハイ北海道予選会が開催されました。今年度のインターハイは男子船橋市、女子八千代市で開催されます。この本戦を目指して4日間に及ぶ熱闘が繰り広げられました。

久しぶりに見た開会式でしたが、当番校である北見北斗高校の見事な開会運営により盛大に行われました。特に吹奏楽の素晴らしい演奏と『高体連の歌』の合唱は感動ものであり、多くの選手諸君の胸に深く刻み込まれたものと思います。

その開会式のギャラリーにて、同席をさせて頂いた大先輩が、北見北斗男子部を全国大会に導いた往年の名将小池春夫氏でした。85歳をという高齢ながら、未だ衰えることのないバスケットボールに対する熱い情熱と、そのひたむきな思いに深く感銘を受けました。

また、その時の主将であった、元北見北斗教諭 横道和寿氏(現北見北斗女子部コーチ)も寄り添い、旧知の師弟愛を見せて頂きました。

【大会感想】

東海大四高校が実力通りの安定した試合運びで、昨年に引き続優勝を果たす。今年の東海は、#4内田を中心として、#5白旗、#6辻、#7大内、#16長澤のスタートで、バランスの良い安定したメンバーであったと思われる。ボール回しも早く、人も動き、リズムのあるバスケットボールを展開していた。決勝リーグ1試合目の札幌工業戦では相手

のゲームコントロールに攻撃リズムが取れず、3ピリオドに同点まで追いつかれるが、内田の好プレーにより流れを引き戻し勝利する。#7大内の成長もありインサイドの安定感も出てきた。また#6辻はフォワードとしては小さいながらも、ゴール下のステップワークの切れの良さは見るものがあった。インターハイではインサイドの高さのハンデを、更に強いディフェンスで堅め、確実なシュート力を持って上位進出を期待したい。

駒澤大学附属苫小牧高校の準優勝、そして『インターハイ初出場』を心より祝福したい。昨年のチームより着々と上位校の常連となり、このチャンスを掴み取った実力に敬意を表したい。田島範人38歳、ヘッドコーチとして12年、わずかなチャンスをものにした幸運な指導者に乾杯である。前年度チームでは新人戦でシード権を取りながらインターハイ予選で主力選手のゲーム中の負傷によりシード権を落とすが、ウィンター予選ではシードチームを破り3位入賞を果たす。そして次の新人戦では地元苫小牧開催で、今まで勝てなかった旭大高校を破りシード権を奪取する。しかし、準決勝の札工戦では、勝ちゲームを延長戦で敗退するという失敗戦を演じ、苦渋を舐めたのもコーチとしての貴重な経験となったものと思う。この新人戦のシード権の確保が今大会の大きな布石となり、そして札工にリベンジを果たしての全国の切符であった。卓越した選手が居ない中、PGの高橋、小辻の度胸の良さ、清水、山田の3pの威力、どこからでも点を取れる大岸、ここという時に仕事をしてくれる川村、不器用だがリバウンドに徹する折戸、それぞれの特徴を良く伸ばし強化できた結果であったと思う。インターハイの『夢舞台』で多くの経験をしてきてもらいたい。

札幌工業高校は激戦の札幌支部を安定した力で勝ち進み第2代表として出場、道大会は第2シードというポジションで、札工としてもインターハイ初出場をかけた大会であった。例年であるが個性的なチームを作ってくる横嶋ヘッドコーチであり、特に今年のチームは昨年からの経験を積んでいる選手であり、相当期待できるものを持っていた。チームの柱である#4板橋、#6藤田のインサイドの粘り、そして2年#13濱尾の3pを生かした力をもって決勝リーグに進出する。しかし、決勝リーグ第一試合の駒澤戦で前半チームの柱であった#4板橋の3ファールや3ピリオドでの#6藤田の負傷により一気に駒澤の流れになってしまったのが残念であった。最終日の東海大四戦ではゾーンディフェンスで相手の勢いを止め、中盤まで互角に戦ったことは大いに評価できる。

室蘭支部から駒澤苫小牧と共にベスト4入りを果たした海星学園は、激戦ブロックの無シードから恵庭南、白樺学園、そしてシード校札幌日大を破り堂々のベスト4入りを果たした。④⑤⑥⑦⑫のスタートメンバーで3日間6試合を戦い抜いた体力と集中力は、大いに称賛できるものである。特に#4田口、#7柴田とのジョイントは最高であり、ディフェンスにヘルプポジションを取らせる時間を与えないパス回しと、ドライブの速さは圧巻であった。決勝リーグでは疲れによるミスが出てきたことと、高さによるリバウンド力の差が点数に大きく左右する結果になるが、多くの試合の善戦に大きな拍手を送りたい。中島ヘッドコーチお疲れ様でした。

2回戦に東海大四と対戦した旭川大学高校は善戦であったが、やはり新人大会でシード権を落としたことが致命的となった。現状では4シード以外はフリー抽選であり、地区順位は考慮されない現状では、新人大会でのシード権獲得の意義は大きいものとなっている。

札幌第4位で念願の全道出場を果たした札幌南高校のベスト8進出は見事であった。ベスト4決めの札幌工業戦では、3ピリオドまで互角の戦いを演じていた。ヘッドコーチ奥田先生の晴れ舞台でもありました。健闘を讃えたいと思います。

船橋市開催されるインターハイ出場権を得た東海大学付属第四高等学校、そして初出場の駒澤大学附属苫小牧高等学校の全国での活躍を心より祈っております。

【審判研修会に参加して】

今大会に合わせて、『第一回A級・公認審判研修会合宿』が行われました。競技の運営から管理、そして選手の技術力向上の手助けをも担う多くの審判員が参加され、精力的に研修を行う姿も見せてもらいました。

日本協会審判指導グループより、審判委員長 橋本信雄氏と副委員長平 育雄氏の両名が講師として招かれ、適切な助言と厳しい苦言も含め、北海道の審判資質向上のためにご尽力して頂きました。二日間の熱意と誠意のこもったご指導に心より感謝をしたいと思えます。その話の中で、特に高校生のゲーム審判の大きな役割の一つに『選手を守り、そして育てるという大切な使命もある。』その言葉が指導者の一員としての私は大変印象的でした。審判技術向上は大会時だけではない日々のバスケットボールに対する興味が、その根底を支えるものであることも感じさせられました。これは指導者、選手、審判員全てに共通するものと再認識させられた研修会でもありました。北海道バスケットボールの競技力を支える審判員皆様の尚一層の研鑽をお願いしまして報告に代えさせていただきます。

国体道予選会は札幌市（江別市）を離れて旭川で開催されます。ウィンター予選は小樽市、新人大会は旭川市とまだまだ戦いは続きます。益々頑張りましょう。